総合都市研究　第27号　1986

高層集合住宅と子どもの遊びや発達に関する研究

――子どもの発達を規定する要因の分析――

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．研究の目的と方法
Ⅲ．調査結果の概要
　1．発達を規定する要因の全体像
　2．各要因の規定の仕方
　3．子どもの発達と遊びの構造
Ⅳ．おわりに

山本清洋*
三宅紀子**
山崎秀夫**
舛本直文**
酒井　誠**

要　　約

本論では，高層集合住宅と子どもの遊びに関する従来の研究の検討及び，(1)子どもの発達を規定する要因の全体像の特定化，(2)各要因の規定の仕方，(3)遊びの構造と発達の関連を明らかにすることを目的とした。対象者として，高層集合住宅に居住する1才から6才までの男女計807名を抽出し，質問紙法による調査を実施した。発達と遊びの構造の関連は，両変数のクロス分析により，更に発達の規定要因の分析は，「乳幼児精神発達質問紙」を基にして発達群をサンプリングし，林の数量化Ⅱ類によって分析を行なった。結果は，次の通りである。

(1) 子どもの発達を規定する要因では，高層居住という物理的要因よりも，母親等の重要なる他者や遊びの構造，年令等に関する要因の規定力が強い。

(2) 遊びの構造と子どもの発達は深い関連がある。具体的には，創造性・社会性・自己表出性の機会を多く内包し，主体の活動量の多い構造を持つ遊びに，子どもが参与することで，望ましい発達がはかれる。

Ⅰ．はじめに

海野は[1]「高層住宅の理想像を求めて－浜屋浜シーサイドタウンにおける事例研究」(1983・a)の中で，高層住宅と子どもの遊びや発達に関連した先行研究を検討し，高層階に居住することが子どもの外遊びの機会を奪うとする説と居住階層別にみた外遊びの時間に差はないとする説を導き出している。この点の解決をはかる意味も含めて，海野（1983・b）[2]は，子どもの外遊びを規定する要因の全体像を明らかにする調査を実施している。その結果，外遊びを規定する要因は，単に高層階居住という物理的要因のみでなく，母親の養育態度，意識等々の社会・文化的要因も存在していることを明らかにしている。しかし，高層階居住との関連については，「直観的には，住戸高が高くなるほど，外遊びに対してマイナスの影響を及ぼすものと考えられる。しかし実際には……影響の仕方が単調ではない。1～2階がマイナスの影響力を持つこと（付き添いの必要な子供の外遊び時間Hを除く）や，15～19階がプラスの影響力を持つことは，予測に反することであったが，その理由は，ここまでの分析ではわからない」(海野B，p 137）と結論し，先行研究で指摘した対立点

＊　東京都立大学理学部
＊＊　東京都立大学都市研究センター・理学部

は，以前として残されている。

その後の先行研究の主なものとして，湯川[3]等の「住環境が子どもの心身の発達に与える影響について」(1985)，及び原等[4]の「地域社会における子どもの教育的・社会的環境に関する研究」他があげられる。従来の研究が，子どもの外遊びを規定する要因を，高層居住を含めた形で，他の文化・社会的要因の全体像を明らかにするにとどまったのに対し，湯川，原等は規定要因の全体像の解明に併せて，「外遊びは，子どもの豊かな発達を促す」という前提に立ち，作業仮説において，発達の内容を具体化した形での要因分析を行っている。湯川等は，子どもの発達を阻害すると予測される不定愁訴[5]を健康評価の具体的内容に特定化し，高層階居住との関連を分析しているが，クロス集計から得られる低層階ほど不定愁訴が少ないという結論と林の数量化Ⅱ類による逆の形での結論との矛盾点は未解決のままである。

原等は生活時間調査を併用した詳細な分析の結果，高層階に居住することは，明らかに外遊びの機会を奪っているという報告をなしている。更に，発達の具体的内容の内，身体的能力の具体的内容として外出能力を特定化し，「外出能力獲得時期において，高層と低層で明白な差があり（1％有意差），8.5ケ月の差がある」[6]ことを報告している。

日本以外では，ARVID BENTOSON, HANS WOHLIN, JEANNE MORVILLE等の研究[7]があげられるが，いずれも，高層階に居住することが子どもの遊びを阻害していると報告している。

以上，簡単に先行研究を追ってきたが，次の諸点が，課題として残されている。

1．「子どもの戸外遊び（遊び）が，子どもの発達を促す」という前提が所与とされているが，遊びの特性いかんによって，発達は促進もされ，逆に阻害されることも考えられる。したがって，遊びの時間と機会の保証に加えて，遊びの構造と発達の関連の分析をすすめる必要がある。

2．高層階に居住することが，子どもの外遊びの疎外的要因であることを特定化する上での対立は，海野・湯川等の分析では，クロス集計の結果において阻外要因となり，林の数量化Ⅱ類の分析結果では高階層が必ずしも阻外要因ではないという報告がなされている。この相違は，統計的な処理方法に起因するとともに，外遊びを規定する要因が，子どもの外遊びと高層階居住の間に介在していることを知らせている。

3．湯川・原等による発達の指標としての，不定愁訴，外出能力は，〔高層階居住－遊び－発達〕の図式を具体的に分析する上で，重要な契機を作った。しかし，子どもの発達をみるという視点からは，それ以上の生産は期待できず，今後，子どもの発達を総合的に把握できる指標の特定化がせまられる。

Ⅱ．研究の目的と方法

1．目的

先行研究の検討の結果，課題として提示した内容の解明が目的となる。具体的には，第一は，遊びの構造と子どもの発達の関係を特定化すること，第二は，子どもの発達を規定している要因を高層階居住を要因群の一つとして含めた形で分析し，特定化することにある。第三には，外遊びと高層階居住の間に，介在する要因の存在を確認することにある。

2．分析枠組

本論の目的を達成する分析枠組を，先行研究の要因分析の結果等を参考にして，図1のように構築した。この枠組は，基本的には，子どもの遊びが発達に影響を与え，その関係を社会文化的要因ないし住居要因，主体的要因が規定しているという前提に立っている。各変数の内容は，以下のとおりである。

A．母親の意識や行動に関する要因群

子どもの発達を社会化の文脈に置いた時に，母親は重要なる他者であり，その行動・意識は文化的力と考えられる。本要因は，その下位領域として，母親の社会的接触，子どもへの係り，養育観の三領域から成る。

B．遊び世界の要因群

遊び世界を構成する要因を大きく2分し，その一つをソフト要因，他をハード要因とした。ソフト要因は，子ども自体の遊び能力の2要因と遊び自体の特性である(イ)創造性要因，(ロ)社会性要因，(ハ)自己表出性要因，(ニ)活動的要因の6領域に分かれる。ハード要因は遊び場の構造と遊び場までの距離等に関する5要因より構成される。

C．主体的要因群

子どもの属性に伴う要因であり，具体的には幼稚園，保育園への就園，調査時点での満年令，性別の三要因より成る。

D．家庭に関する要因群

社会化の視点から抽出された重要なる他者に関する要因から成っている。父の年令，母の年令，両親以外の同居人の有無，兄弟の有無，母の就業等の要因が具体的な内容である。

E．住居要因群

子どもが住んでいる住居に係るもので，かつ遊び世界に関連の深い要因と，住居構造，住居環境入居時期の領域から6要因を抽出した。

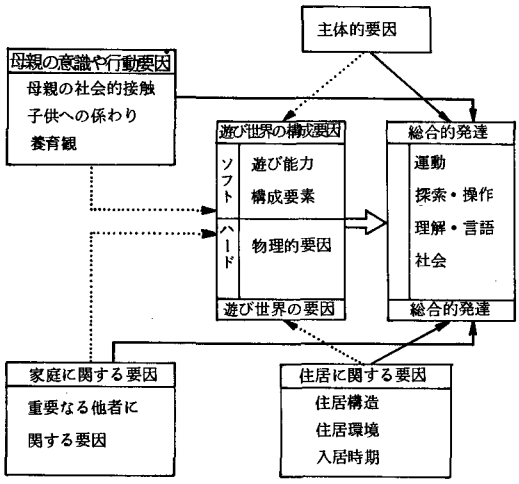


図1　分析枠組

3．調査の期間・方法・対象

多摩ニュータウン及び高島平公団住宅に住む，1才から6才までの子ども男女807名を対象として，社会調査を実施した。子どもの発達に関する調査は，津守真等の「乳幼児精神発達質問紙」を母親の評価によって実施した。更に，遊びと発達の諸要因に関しては，別に質問紙を作り，同様に母親の評価によって実施した。

調査期間は，昭和60年7月から10月である。

4．変数（要因）の決定

今回は，発達の規定要因の分析に関しては，林の数量化Ⅱ類によったが，変数決定の操作は次のように行なった。

(1) 外的基準（子どもの発達）

前述した「乳幼児精神発達質問紙」による調査結果から，各々(イ)運動，(ロ)探索・操作，(ハ)社会，(ニ)理解・言語の4領域の得点を算出し，次いで，4領域の合計点を出し，それらを個人の発達の指標とした。更に，対象者を得点を基に3分化し，上位得点群と下位得点群を抽出し，前者を高発達群(111名)，後者を低発達群(85名)とした。中間群を捨象した主な理由は，発達を規定する要因を明確に特定化することにある。

(2) 説明変数

当初，先の分析枠組に示した要因群から合計47の要因を抽出し，それらを説明変数として，林の数量化Ⅱ類による判別を行った。その後，全説明変数の中から，偏相関係数が0.05以上の変数を拾いあげて，最終的には，(A)母親の意識や行動要因8，(B)遊び世界がソフト要因9，ハード要因4の計13，(C)主体要因3，(D)家庭要因4，(E)住居要因4，全体で32要因を説明変数とした。

Ⅲ．調査結果の概要

1．発達を規定する要因の全体像

表1に示した全変数のレンジ及び偏相関の値をもとにし，判別力の高い変数（本調査では，レンジが0.50以上を採用した）を各要因ごとにまとめれば次のようになる。

表1　各変数のレンジと偏相関

変数		変数	レンジ	順位	偏相関
母親の意識や行動		1. エレベーターの使用	0.3914		0.2688
		7. 近所の人との付き合い	1.0356	②	0.2609
		8 母親の外出日数	0.1447		0.1511
		16 遊び場への関心	0.2289		0.2185
		17 子どもへの付き添い	0.1453		0.1641
		18 母以外の付き添いの有無	0.3359		0.2840
		24 母の養育観(友達について)	0.1006		0.1037
		29 母の養育観(ごっこ遊び)	0.8974	④	0.3882
遊び世界の要因	ソフト要因	34 子どもの外出能力	0.5811	⑫	0.3303
		35 子どもの遊び能力	0.5987	⑨	0.2374
		38 遊びの創造性（室内）	0.5925	⑩	0.3828
		39 遊びの創造性（屋外）	0.2202		0.2252
		40 遊びの社会性（室内）	0.3852		0.2696
		41 遊びの社会性（屋外）	0.2774		0.2151
		42 遊びの表出性（室内）	0.3614		0.1949
		43 遊びの表出性（屋外）	0.8095	⑦	0.3062
		44 遊びの活動量（室内）	0.1667		0.1973
	ハード要因	46 部屋の広さ	0.1698		0.1373
		48 遊び場までの距離	0.9159	③	0.2300
		49 遊び場の自然・変化	0.6361	⑧	0.3191
		50 遊び場の道具	0.1545		0.1006
主体的要因		32 幼稚園・保育園への通園	0.1694		0.1438
		57 満年令（調査時）	2.1402	①	0.8633
		58 性　別	0.0053		0.0077
家庭要因		51 父親の年令	0.8692	⑤	0.3074
		52 母親の年令	0.5843	⑪	0.2884
		53 同居人の有無	0.1472		0.0786
		59 兄弟の有無	0.1137		0.1307
住居要因		60 居住階	0.1319		0.1764
		68 間取り	0.8267	⑥	0.3849
		69 入居時期	0.1756		0.2241
		71 以前の環境	0.2300		0.2437

(1)　A群〔母親の意識や行動に関する要因〕では，⑦母親の近所の人との付き合い，㉙母親の養育観（ごっこ遊びについて）の2変数があげられる。

(2)　B群〔遊び世界の要因〕では，㉞子どもの外出能力，㉟子どもの遊び能力，㊳遊びの創造性(室内遊び)，㊸遊びの自己表出性，㊽遊び場までの距離，㊾遊び場の構造の6要因があげられる。

(3)　C群〔主体的要因〕では，当然の結果ではあるが，㊼調査時の満年令が高い判別力を示している。

(4)　D群〔家庭に関する要因〕では，㊶父親の年令，㊷母親の年令の2要因である。

(5)　E群〔住居要因〕では，㊽部屋の間取りの1要因のみが規定力の強い要因という結果を示し，㊿居住階層は，レンジが0.1319と非常に低い値を示している。

次に判別力の低い(発達を規定する力の弱い)要因（レンジの値が0.20以下）をあげれば，次のようになる。

(6)　A群では，⑧親の外出回数，⑰子どもが遊ぶ時の付き添い，㉔母の養育観（友達の必要性）の3要因があげられる。

(7)　B群では，全変数13の内，㊹遊びの活動量（室内），㊻室内遊びの部屋の広さ，㊿遊び場の遊具の3要因のみがあげられる。

(8)　C群では，㉜幼稚園，保育園への通園，㊽性別の2要因があげられる。

(9)　D群では，㊸母以外の同居人の有無，㊾兄弟の有無の2要因である。

(10)　最後に，E群では，㊾入居時期及び㊿居住階の2要因である。

以上の結果で，判別力の強い要因は，子どもの発達に強い規定力を持つ要因として，又，判別力の弱い要因は，子どもの発達に余り，規定力を持たない要因と考えてよい。

以上の結果から，後の考察と発達を規定する要

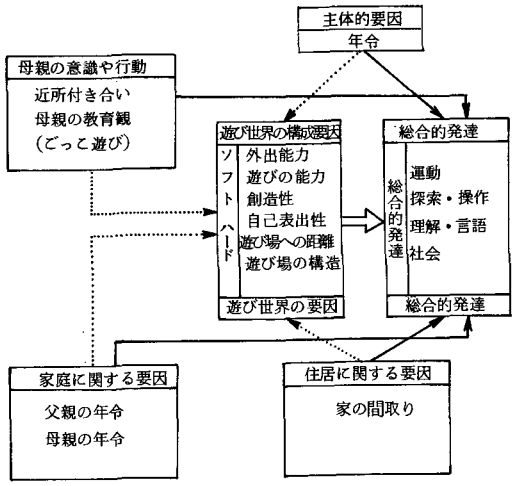


図2　規定要因の全体像

因の全体像を把握するために，分析枠組をもとに構造化した規定要因の全体像が図2である。

2．各要因の規定の仕方

図3は，判別力の強い要因のカテゴリーのウエイトを示している。前項までに，高発達・低発達の判別に関連する要因が明らかになったので，それらの要因が，どのような規定をしているかについて，若干の考察をすすめてみよう。

(11) 要因7（母親の近所の人との付き合い）はレンジが1.0356を示し，全変数中2番目に高い。カテゴリーの内容をみると，近所の人々との付き合いの少ないことが，高発達群に寄与しているのに対し，近くの人との深い付き合いは，高発達，低発達の判別にほとんど寄与していない。母親が近所の人と付き合う際に，子どもの遊びがどのように位置づけられているのかに左右されると推察できるが，明確な解釈は，本論の分析ではみい出せない。

(12) 子どもに対する母親の養育観10変数の内，㉙ごっこ遊びに対する考えが唯一の規定要因として抽出できた。カテゴリーをみると，ごっこ遊びを重要と考える態度が高発達に寄与し，重要としない態度は，低発達に寄与している。

幼児の世界は，その大部分が遊びの世界であることを考えると，遊び世界の要因群から規定力の強い要因が抽出されるのは自然であるが，現実には，どのような構造の遊びが子どもの発達に寄与するのかを分析することが大切なことである。その意味では，遊び世界の構成要因のいずれの規定力が大きいかをみることも重要であり，更に，規定力の大きい変数の内容分析も更に重要となる。

(13) ㉞子どもの外出能力（12位）では，カテゴリー(3)（危いので誰かが付き添ってゆく）は，低発達群に寄与し，カテゴリー(4)（1人では出かけられない）は，高発達に寄与している。又，外出能力の強いカテゴリーは，いずれの発達群にも寄与していない。この結果は，幼少の場合は一人で外出する能力があっても，母親の安全への配慮から，外出を制限されたり，外出能力の劣る場合は，母親が積極的に遊びの機会を作るなど，母親の介在によって，子どもの外出能力は遊びにつながっていることを知らせている。

(14) ㉟子どもの遊び能力のレンジは0.5987（9位）である。内容をみると，遊び能力の高いことが高発達と関連し，逆に遊び能力の低いことは低発達に関連していることがわかる。更に母親の手助けが，遊び能力と遊びを結びつける上で大きな役割を果たすことがわかる。

(15) ㊳遊びの創造性の場合，創造性が豊かなカテゴリーが高発達に寄与し，逆に創造性の低いカテゴリーが低発達に寄与している。

(16) ㊷遊びの表出性（室内）のレンジは0.8095を示した。カテゴリー(1)（ワイワイガヤガヤと活気にみちていた）が，低発達に強く寄与し，他のカテゴリーはいずれにも寄与していない。

(17) ㊽遊び場までの距離は，レンジが0.9159（3位）と，かなり強い規定力を持っている。内容をみると(3)（やや遠い所に遊び場がある）は，低発達群に寄与し，(4)（遠くに遊び場がある）は，高発達群に寄与している。その他のカテゴリーは，いずれにも関与していない。この結果は，遊び場の距離が，発達にとって，疎外要因になるか否かは，母親の介在によって左右されることを示している。

(18) ㊼対象者の年令は，当然のことであるが，最も高い規定力を持っている。

(19) ㊶父親の年令，㊷母親の年令ともに，規定の仕方に変化がみられるが，この結果はカテゴリーのサンプル数に偏りがあることに起因していることが推察されるので，考察の対象から除外する。

(20) 住居要因では，㊽家の間取りが強い規定力を持ち，レンジが0.8267である。規定の内容をみると，(1)（1ＬＤＫ）は，低発達に寄与し，(3)（2ＬＤＫ）及び(6)（その他，4ＤＫ以上）が高発達に寄与している。室内遊びの空間の広さ，又は経済的要因等の関連が推察

される。

3．子どもの発達と遊びの構造

表2～表9は，子どもの発達と遊びの構造の関連を示すものである。遊びの構成要素を(1)から(4)に尺度化しているが，いずれの要素も，(1)から(4)になるにつれて遊びが豊かになるという仮定をおいている。その視点から，発達の段階との関連を要約すると次のようになる。

(1)　遊びの創造性は，明らかに高発達に寄与していることがわかる。この結果は，前項の林の数量化Ⅱ類の分析結果と同じであり，創造力を発揮させる機会を持つ遊びが，子どもの発達にとって重要であることを知らせてくれる　〔表2，表3〕。

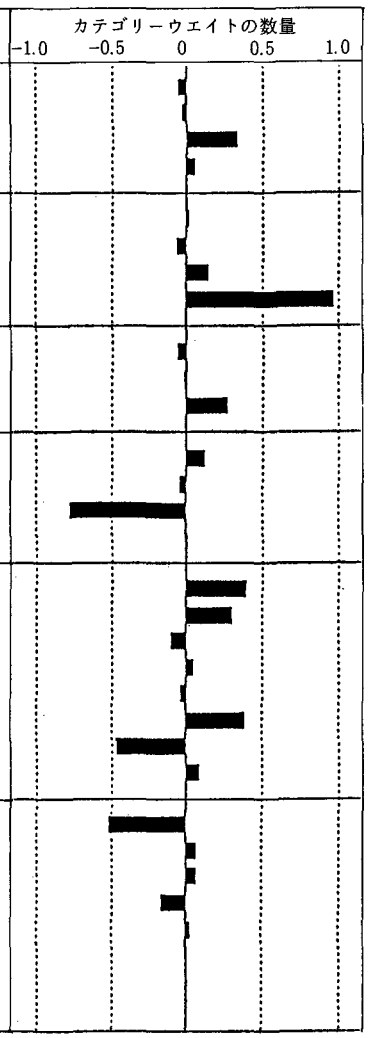
(2)　内遊びの場合は，社会性が高発達になるにつれて多くなる。一方，外遊びの場合，〔低発達〕:〔中・高発達〕に2分すれば，社会性が高発達につながることがわかる（表4．表5）。

(3)　遊びの自己表現性の場合も〔低発達〕:〔中・

図3　規定要因のレンジとカテゴリー

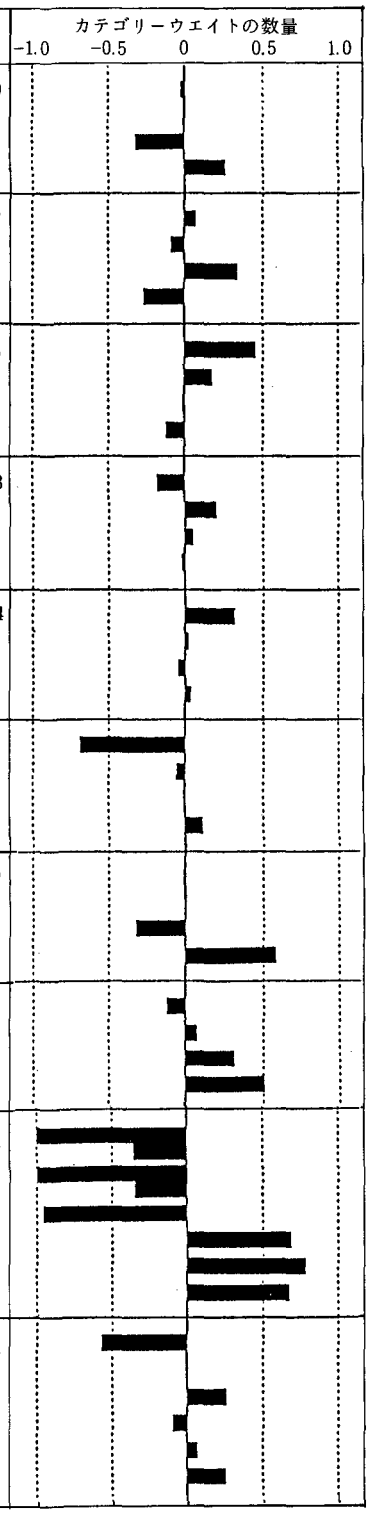
(1)

		要　　因	レンジ
母親の意識や行動	3.エレベータの使用	(1) いつも使う	0.3914
		(2) たいてい使う	
		(3) あまり使わない	
		(4) ほとんど使わない	
	7.近所の人との付き合い	(1) 何でも話せる人が数人いる	1.0356
		(2) 立ち話をする人が数人いる	
		(3) あいさつ程度	
		(4) あいさつもしない	
	18.母以外の付き添い	(1) いる	0.3358
		(2) いない	
		(3) 現在付き添いの必要がない	
	29.どこっについて遊び	(1) 非常に重要である	0.8974
		(2) 重要である	
		(3) 重要でない	
		(4) まったく重要でない	
家庭的要因	51.父親の年令	(1) ～25才	0.8692
		(2) 26才～29才	
		(3) 30才～34才	
		(4) 35才～39才	
		(5) 40才～44才	
		(6) 45才～49才	
		(7) 50才～	
		(8) 父親がいない	
	52.母親の年令	(1) ～25才	0.5843
		(2) 26才～29才	
		(3) 30才～34才	
		(4) 35才～39才	
		(5) 40才～44才	
		(6) 45才～49才	
		(7) 50才～	
		(8) 母親がいない	



(2)

		要　　因	レンジ
遊びの世界の構成要因（ソフト要因）（室内）	34.外出能力	(1) 一人で出かけられる（住棟外） (2) 隣の家くらいなら出かけられる (3) 危いので誰かが付き添ってゆく (4) 一人では出かけられない	0.5810
	35.遊びの能力	(1) 友だちと活発に遊ぶことが多い (2) 友との遊びも好むが一人遊びも多い (3) 友と遊ぶのに親の手助けがいる (4) 親が相手をしないと遊ばない	0.5987
	38.創造性（室内）	(1) いろいろと工夫し，何かを作る (2) 時々，何かを作ったり，変える (3) 偶然に遊び方が変わる (4) 余り変化がない	0.5925
	40.社会性（室内）	(1) 3人以上の約束のある遊び (2) 2～3人で時々話して遊ぶ (3) 2～3人でいるが話はしない (4) 親あるいは一人で遊ぶ	0.3613
	42.表出度（室内）	(1) みんなでワイワイガヤガヤ (2) 大体みんなでワイワイガヤガヤ (3) 時々，ことばを交し合う (4) 特定の子ども中心	0.3614
	43.表出度（屋外）	(1) みんなでワイワイガヤガヤ (2) 大体みんなでワイワイガヤガヤ (3) 時々，ことばを交し合う (4) 特定の子ども中心	0.8095
（ハード要因）	48.遊び場までの距離	(1) すぐそばにある (2) 比較的近いところにある (3) やや遠い (4) 遠くにある	0.9159
	49.遊び場の自然環境	(1) 草・木・砂，起伏がある (2) 草・木・砂で平らである (3) 草・木のみで平らである (4) 平らな地面のみ	0.6361
主体的要因	57.年令	(1) 1才 (2) 2才 (3) 3才 (4) 4才 (5) 5才 (6) 6才	2.1402
住居要因	58.間取り	(1) 1LDK (2) 2　DK (3) 2LDK (4) 3　DK (5) 3LDK (6) その他	0.8267



高発達〕に2分すると，明らかに〔中・高発達〕に自己表出の機会が多くみられ，自己表出性が子どもの発達に関係することを示している〔表6．表7〕。

(4) 遊びの活動量は，他の3つの要素と比較した場合，同様な関連はみれないが，傾向としては活動量の豊富なことが，子どもの発達に寄与することがわかる〔表8．表9〕。

以上の要約から，子どもの発達は，創造性・社会性・自己表出の機会が多く，かつ活動量の多い遊びによって促進されるという結論が導き出せる。

この結果，先行研究の検討で課題として提示した「遊びに参与することは，子どもの発達を促す」という所与としての前提が検証でき，同時に，遊びの中の創造性，社会性，自己表出性，活動量は，発達を促すための構成要素として特定化できる。

表2　発達と創造性(1)　(%)

構成要素／発達群	(1)変化がなく初めと同じ	(2)偶然に遊び方が変わる	(3)時々、遊び方を変える	(4)いろいろ工夫して遊び方を変える	D・K
低発達	45.8	40.0	28.7	14.1	26.4
中発達	33.8	38.7	43.8	49.3	31.7
高発達	15.3	16.0	24.8	34.3	36.4
D・K	5.1	5.3	2.7	2.3	5.5

N＝807　　SIG・ 0.000

表3　発達と創造性(2)　(%)

構成要素／発達群	(1)変化がなく初めと同じ	(2)偶然に遊び方が変わる	(3)時々、遊び方を変える	(4)いろいろ工夫して遊び方を変える	D・K
低発達	30.8	27.3	23.6	13.3	31.7
中発達	43.3	44.8	46.8	46.0	37.4
高発達	22.5	25.0	26.6	36.3	28.8
D・K	3.4	2.9	3.0	4.4	2.1

N＝807　　SIG・ 0.034

表4　発達と社会性(1)　(%)

構成要素／発達群	(1)一人遊びか母といっしょ	(2)仲間と話をしないで遊ぶ	(3)二・三人で時々話をして遊ぶ	(4)三人以上での約束のある遊び	D・K
低発達	41.0	57.9	20.5	12.0	30.2
中発達	42.0	15.8	48.1	43.0	37.5
高発達	13.3	15.8	29.4	42.3	26.0
D・K	3.7	10.5	2.0	2.7	6.3

N＝807　　SIG・ 0.000

表5　発達と社会性(2)　(%)

構成要素／発達群	(1)一人で遊ぶか母といっしょ	(2)仲間の話をしないで遊ぶ	(3)二・三人で時々話して遊ぶ	(4)三人以上での約束のある遊び	D・K
低発達	49.5	35.8	24.3	7.7	30.4
中発達	37.1	45.3	46.0	46.7	40.6
高発達	8.1	13.2	27.9	42.3	25.4
D・K	5.7	5.7	1.8	3.3	3.6

N＝807　　SIG・ 0.000

Ⅳ. おわりに

前章までの考察によって，先行研究が残した課題である(1)遊びの構造と発達の関係，(2)子どもの発達を規定する要因像の特定化，(3)遊びと高層階居住の間に介在する要因の確認について，ほぼ以下の結論を得ることができた。

(1)　遊びの構造と発達は深い関係を持ち，構成要素である創造性，社会性，自己表出性，及び活動量が豊富に内包された遊びが，子どもの高発達に寄与する。

(2)　子どもの発達を規定する要因は，高層居住という物理的条件でなく，むしろ重要なる他者の存在や遊びの構造に関する要因の規定力が強い。更に，それらの要因は互いに独立しておらず，互

表 6.　発達と自己表出性(1)　(%)

構成要素 / 発達群	(1)全く特定の子が中心	(2)特定の子はいるが、時々話し合う	(3)大体、話し合いの雰囲気がある	(4)みんなが話して活気にみちている	D・K
低発達	62.4	24.5	23.5	15.9	33.8
中発達	25.0	50.0	43.0	46.8	40.9
高発達	6.3	20.9	30.9	34.9	20.8
D・K	6.3	4.6	2.6	2.4	4.5

N＝807　　SIG・　0.007

表7　発達と自己表出性(2)

構成要素 / 発達群	(1)全く特定の子が中心	(2)特定の子はいるが、時々話し合う	(3)大体、話し合いの雰囲気がある	(4)みんなが話して活気にみちている	D・K
低発達	42.9	22.3	22.3	17.5	37.4
中発達	33.3	46.9	45.6	45.6	39.6
高発達	14.3	27.7	29.8	33.7	19.3
D・K	9.5	3.1	2.3	3.2	3.7

N＝807　　SIG・　0.145

表8　発達と活動量(1)　(%)

構成要素 / 発達群	(1)移動しないでその場で遊ぶ	(2)時々、移動している	(3)動く方が多い	(4)活発に動きまわっている。	D・K
低発達	19.4	23.4	33.8	21.4	25.5
中発達	53.1	45.1	40.8	42.9	40.0
高発達	27.5	30.0	20.7	31.0	29.1
D・K	0.0	1.5	4.7	4.7	5.4

N＝807　　SIG・　0.013

表9　発達と活動量(2)　(%)

構成要素 / 発達群	(1)移動しないでその場で遊ぶ	(2)時々、移動している	(3)動く方が多い	(4)活発に動きまわっている。	D・K
低発達	25.9	30.4	28.0	18.2	30.7
中発達	51.9	43.4	48.3	43.9	37.0
高発達	14.8	22.5	20.8	35.8	28.4
D・K	7.4	3.7	2.9	2.1	3.9

N＝807　　SIG・　0.001

※表２～表９.(1)は内遊び，(2)は外遊びを表す。

いに関連を持ちつつ，発達を規定している。本調査では，説明変数の一つとして年令を位置づけたため，そのレンジが当然のこととして，非常に高い値を示した。結果として，他の要因が消去されたことも考えられる。今後は，年令別にサンプルを抽出し，分析をすすめることが必要となる。

(3) 従来の研究の対立点である高層階居住という要因が外遊びの疎外要因であるか，どうかという点については，高層階に居住することは，外遊びにマイナルの影響を与えるが，母親等の介在によって，その影響の在り方は変わってくると結論ずけられる。

注及び引用文献

1）海野道郎他（a）
高層住宅の理想像を求めて一芦屋浜シーサイド・タウンにおける事例研究一関西大学社会学部研究紀要，第46号 pp 271～295. 1983

2）海野道郎他（b）
高層住宅は子供の外遊びを阻害するか（2），外遊びの規定要因の全体像（続）一芦屋浜シーサイド・タウンにおける事例研究（3）一関西大学社会学部紀要第48号 pp 137～147, 1984

3）湯川利和
住環境が子どもの心身に与える影響について
日本建築学会近畿支部研究報告集 pp 401～408 1985

4）原 芳男（a）
地域社会における子どもの教育的・社会的環境に関する研究 教育行動科学研究会 財団法人 伊藤忠記念財団 1980
原 芳男（b）
放送のための新しい幼児番組の開発 幼児教育プログラム開発研究会 1979

5）不定愁訴とは，これといった原因がないのに感じられる身体の不調（例えば，疲れ，目の疲れ，肩がこる，腰が痛む，手足がしびれるなど）を言う （湯川利和 上掲書）。

6）原 芳男 上掲書（b） p 68.

7）彼等の一連の研究の要約は，NIC NILSON の High-rise or low-rise housing, International Playground Association, 1972 に紹介されている。

Key Words（キー・ワード）

Child's Development（子どもの発達），Play（遊び），High-rise Housing（高層住宅）